

第628回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2020年11月度 ——

- ◇ 開催日
2020年11月16日(月)
- ◇ 議題
＜テレビ番組＞「水と緑の物語 Voice」
放送日：9月19日(土)午前9時30分～午後4時30分
- ◇ その他

九州朝日放送株式会社

第628回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2020年11月16日(月)午後3時25分～4時50分

2. 開催場所 九州朝日放送 役員会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 7名

委員長	戸田 康一郎
委員	藤村 まこと
委員	山崎 靖
委員	中山 裕二
委員	石井 靖子
委員	守田 有理子
委員	石橋 和幸

欠席委員数 1名 (レポート代読)

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和 氣 靖
常務取締役	笹 栗 哲 朗
総合編成局長兼ラジオ局長	坂 井 剛
報道情報局長	柴 田 高 宏
総合編成局 番組戦略部長	濱 田 克 則
総合編成局 番組戦略部 プロデューサー	北 島 泰 洋
番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	石 橋 聡
番組審議会事務局 (視聴者・広報室)	松 永 俊 郎

4. 議 題

- (1) テレビ番組「水と緑の物語 Voice」

放送日：9月19日(土)午前9時30分～午後4時30分

- (2) 11月・12月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
(3) 10月 視聴者・聴取者応答状況の報告
(4) その他

5. 議事の概要

「KBC 水と緑のキャンペーン」は、エリアの皆さんにふるさとについて足元から考えてもらおうと、1997年にスタートした環境啓発活動で、今年で24回目を迎えました。例年であれば、夏場にそのハイライトとして「水と緑の物語」と題した長時間の生放送番組と関連イベントを展開していますが、今年は新型コロナウイルス感染症などの影響から、イベントの開催は断念。9月19日(土)午前9時30分から午後4時30分に7時間の生放送番組をお届けしました。委員からは、およそ1時間40分に再編集したものを視聴の上、意見を賜りました。

委員の意見 (概要)

委員からは、

- コロナ禍や自然災害で疲弊する中、負けずに頑張ろうとする「ふるさとの声」を届け、医療支援や災害復興につなげる素晴らしい企画。ローカル局の果たすべき大きな役割にもなる番組で、企業の取り組む姿勢として求められるSDGs(世界を変えるための17の目標)の観点からも有意義だと思う。
- 多くの人の「声」に耳を傾け、一人ひとりができることを考え、誰かを応援しようという番組のテーマ「Voice」が終始貫かれていた。テーマに沿って、それぞれの番組カラーを大事にしながらかつて様々な特集が組まれており、変化に富んだ構成で面白かった。いつもの「水と緑の物語」なら、放送中にイベントがあって、時間内に何かが完成したり、実現する企画があったが、今回は(コロナ禍で)それができず、「Voice」というテーマで心をつなげていこうという試みは大変良かった。
- 司会を担当した新人の松下由依アナウンサーをそれとなくフォローする長岡大雅アナウンサーの「少し熱すぎるのではないかな？」とも感じられるほど元気な進行が、番組に明るさを与え、好感を抱いた。各番組の企画を披露する出演者たちの個性も遺憾なく発揮され、とても楽しく見られた。
- 笑顔の声「笑声(えごえ)」について話をするゲストのアンミカさんの言葉選びの素晴らしさや言葉の裏にある重み、奥深さ、言葉に対する思いが番組全体を引き締めていたと思う。アンミカさんの心のこもったコメントは番組と今回のテーマ「Voice」にマッチしていた。
- 宮本アナウンサーによる「マイクロツーリズムのすすめ」は、ウィズコロナの中で、何に注意し、どう行動すれば安心して旅ができるか、専門医監修のもとレクチャーしていてよ

かった。身近な地域を見直す点でも、宮本アナウンサーのニッチな視点は面白かった。

- 久留米信愛学院 合唱部にスポットを当てた「高3応援団！」には感動した。コロナ禍で、「声を出す」「歌う」ことが制限され、悔しさや割り切れなさを感じていた生徒たちが、生放送で歌うことを提案され、ひたむきに取り組む姿には胸を打たれた。「合唱」が「Voice」のテーマとマッチしていた。テレビとラジオの同時生中継企画は当事者たちにとって「粋」な計らいであったと思うし、視聴者にも共感と感動を与える内容だった。
- 「お取り寄せマルシェ」は、単に特産品の紹介ではなく、食材を出荷できない生産者を助けることにもフォーカスされており、困っている人を助けることに繋がると共感した視聴者もいたと思う。地元に着した KBC ならではの取り組みで特徴もあって良かった。
- 「タビ好き 水と緑の物語特別編」は、前川清さんと沢田アナウンサーのほんわかとした感じが良く、温かさが伝わるコーナーだった。被災地を元気づける番組は肩に力が入って表現がオーバーになりがちだが、二人のやりとりが自然体でリラックスできた。

などの評価を頂きました。

また、気になる点や望むこととして、

- 「水と緑のキャンペーン」に新型コロナウイルスと自然災害を取り入れようとしたのだろうが、キャンペーンとは性質が異なる新型コロナウイルス感染を取り込もうとした試みに無理があったのではないか。テーマが盛りだくさんになっている感じがして、もともと掲げるテーマ (Voice) が「見えずらい」印象を受けた。
- 「水と緑の物語」とテーマ (Voice) がどう関わっているのかがよく分からなかった。より多くの人の声を「聞く」「伝える」という点は不十分だったと思う。もっとたくさんの「Voice」のリレーを取り上げたら良かったのではないか。
- タイトルから、美しい「郷土」を残したいという人びとの声を伝えるドキュメンタリー番組を想像したが、MC や出演者、ゲストが派手に登場するなどして、バラエティー番組なのか何なのか分からなくなった。仲間うちで盛り上がっていた印象で、テンションの高さについていけなかった。
- 「アンプラグド生活」で紹介のご夫妻による「足るに知る」や「不便だから感じる豊かさ」との言葉は印象深かったが、そうした言葉 (Voice) を紹介する番組でありながら、言葉をまとめるスタジオや MC のコメントが軽く感じられた。
- 7 時間の番組を大幅に編集して、それでもおよそ 1 時間 40 分という長さになってしまっていた。その結果、番組の趣旨が「よく分からない」と感じた。番組の良しあしではなく、番組審議会の課題として、無理があったように思う。

などの評価や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- 視聴用 DVD は実際の放送を 4 分の 1 ほどに短縮したものであったので、本来お伝えしたかった部分が欠けてしまったかもしれない。しかし、2020 年を考えるうえで、新型コロナウイルスは欠かせない。新型コロナウイルスと自然が全く別のもととは考えておらず、そうした影響で苦しむ人たちの声を伝えるべく「Voice」をテーマに番組をお届けした。

- 例えば「高3応援団！」はもともとあった「シリタカ！」の企画。「アサデス。KBC」や「シリタカ！」などの各番組が普段やっている企画を、番組の良さ、カラーを大切にしながら、今回の7時間の生放送番組を「集大成」として位置づけ取り組んだ。様々な災害に遭った人たちの声を聞くというような構成にした。
- 「水と緑の物語」は、視聴者やリスナーに対しての「感謝祭」。制作サイドにとっては「文化祭」的な意味合いもある。KBCの強みであるチームワークを生かし、例年は「オールKBC」で挑んでいるが、今年は「コンパクト水と緑の物語」に挑む年になった。
- 制作サイドとしては、どうすればコンパクト化した「水と緑の物語」が最大効果を生むのかに苦心した。考え抜いたすえ、①各番組で企画を育てること、②社内横断的な連携を図ること、を重視。関係部署のベクトルが正しく「Voice」に向いているのか話し合いを重ねた。
- 今回は新型コロナウイルスの影響で（例年実施の）VTRで紹介した商品をイベント会場で販売するなどの取り組みがかなわなかった。代わりに通販会社の協力を得ながら、新しい形のマルシェ、「水と緑の物語」を提案できたのではないかと考えている。
- どうしてゲストがモデルのアンミカさんだったのか視聴者に伝えきれなかった部分は反省点。アンミカさんは自らの声をしっかりと発信される方。「声」を大切にしておられる印象だったので、色々なことで苦しむ人、頑張る人の声を拾う番組にマッチしていると思いきゃスティングした。
- 「水と緑の物語」は放送を通して消費者と生産者の橋渡しなど、地域貢献に主眼を置いている。視聴者やリスナーからの浄財やイベント（今回は通販）の利益の一部は様々な形で募金に充てられている。過去には植樹のための募金に充てることもあったし、自然災害が多発する近年では自治体を通じ被災地に届けられている。

などの説明をしました。